

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

# にしあいづ物語100選 その75

文：田崎 敬修

## なだれ 雪崩に悩まされた越後街道

享和3年(1803)2月10日、越後長岡藩の家臣・長沢茂弘と柳町年綱が藩命により会津から白河→棚倉→石川→三春→郡山→磐梯熱海→会津と巡遊した時の往路のことでした。車峠を過ぎて上野尻宿の宿屋に入ってくつろいでいると、この上野尻宿から野沢宿に向かって2km程の所で雪崩に巻き込まれ助けを求めて叫ぶ声を聞いたという者がやって来て、さあ大変と宿場の人たちが木鋤(先だけに鉄の刃がついた木製のスコップ)を持って走って行く様子が耳に入ってきました。しばらく過ぎて命には別状なかったといって雪崩に巻き込まれた村人が戸板に乗せられて運ばれてきました。その様子を見て、明日は自分たちが通る道だと思えば大変心細い思いで2人は顔を見合わせたのでした。

また、安政7年(1860)2月3日、越後村上家の家臣・豊島藤兵衛という侍が村上に帰る途中、槍持ち1人と下野尻村の人足寅吉と共に、白坂村分の車峠中頃の土橋の手前で大雪崩に飲み込まれてしまいました。藤兵衛だけはすぐに雪の下から這い出したのですが、他の2人は雪の下でした。雪崩発生<sup>しら</sup>の報せを受けて下野尻・白坂・宝川・八ツ田・福取・野沢代官所組から100人程の役人衆がやって来て、総勢600人程で2人を探し、やっと寅吉を見つけ掘り出したのですが間に合いませんでした。しかし、槍持ちは見つからないので同じ人数で3日間探し続け、やっと雪の下から掘り出したのですが、当然命はありませんでした。2人とも歳は25歳で藤兵衛は43歳でした。雪崩はこの救出作業中の初日にも再び発生し4人が雪の下になってしまいました。大勢の人がいたのですぐに助け出されました。

雪が消えた同年5月、村上家から2人の侍がお礼のため若松の役所にやってきました。そして、同年6月2日には津川代官所の帳書3人と郷廻り1人に、その他海道組の村々と野沢組の役人へ礼金として金1分ずつが届けられたそうです。

なお、軽沢間宿付近の越後街道は昔、切石川の川道を歩くようになっており、冬期間になると切石川左岸の山地からの雪崩に旅人と村人はおびえながら通っていました。元文4年(1739)に右岸の岸壁を削る工事が約1080mに渡って行われ、雪崩の恐怖からやっと解放されたのでした。

(参考文献：西会津町史第1巻・通史I他)



現在の車峠

### 今月の表紙

今月の表紙は、大盛況となった西会津なつかしCarショーより。町内から愛車とともに参加していた布施さんとお孫さんです。素敵な笑顔をありがとうございます。

(2ページから関連記事)

### 編集後記

特集でもお伝えした通り、広報にしあいづは今月号で777号を迎えました。

広報紙の担当になりまだ3カ月ですが、7月号で777号と、縁起の良いゾロ目号の作成に携わることができてありがたく思っています。特集記事の作成にあたり、これまでの広報紙を見ると、歴代の広報担当者や取材に協力してくださる町民の皆さんのおかげで今の広報にしあいづがあるんだと改めて感じました。

次は888号に向け、これからもさまざまな情報や話題をお届けします。  
(伊藤)